

私たちと患者さんは、同じゴールを目指す 「安全づくりのパートナー」です

パラダイムシフト

医療安全は「医療者だけが守るもの」から、「患者さんと共に創り上げるもの」へと進化しています。
(WHO・厚生労働省推奨)



医療者の
専門知識と
確認体制



最高レベルの
安心と
医療安全



患者さん自身の
気づきと
身体感覚

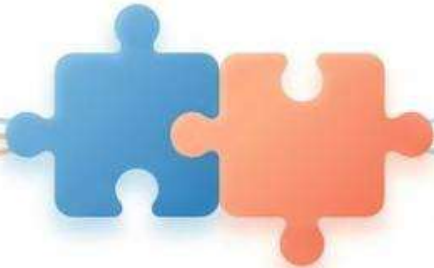
患者参加で
不安全事故を
最大15%低減
(WHO推計)

最強の協働者

ご自身の身体を最もよく知っているのは、患者さん自身です。私たちは患者さんを「サービスを受ける側」としてではなく、医療チームの「大切な一員」としてお迎えします。

患者さんの「いつもと違う」という気づきが、 最強のセンサーになります

日々の確実なケアのために



【一緒に確認】

お名前のフルネームと生年月日の名乗り、お薬や点滴のラベル確認。これは単なる作業ではなく、双方向のコミュニケーションの第一歩です。



【一緒に防ぐ】

転倒予防のために、患者さんの身体機能や慣れない環境のリスクを共有し、安全な行動範囲や履物（運動靴など）を「共に合意する」ことが重要です。

小さな変化の早期発見のために



【違和感の共有】

“「さっきと言っていることが違う」”

“「昔飲んでいない薬の形だ」”

“「検査結果をまだ聞いていない」”

医療者とは異なる視点を持つ患者さんやご家族の違和感は、何よりも的確な「安全のセンサー」です。

「声に出しやすい」雰囲気づくりが、 見えないリスクを溶かします



形式的な問いかけ：
「何か質問はありますか？」

患者さんは遠慮して
「特にありません」と
答えてしまいがちです。



具体的なオープン・クエスチョン：
「ご自宅で飲んでいたお薬と違うところがありますか？」



具体的なオープン・クエスチョン：
「今日の検査の説明で、わかりにくかった部分は
どこでしょうか？」

患者さんが躊躇なく想いを伝えられる（Speak Up）環境を作ることが、私たちの最大の防波堤になります。

すべての職種で患者さんの声を受け止め、 感謝を伝える文化を育てます

【医師】

治療方針を共に決定し、素朴な疑問にも傾聴する姿勢を示します。



【看護師】

最も身近な存在として違和感をいち早く察知し、情報のハブになります。



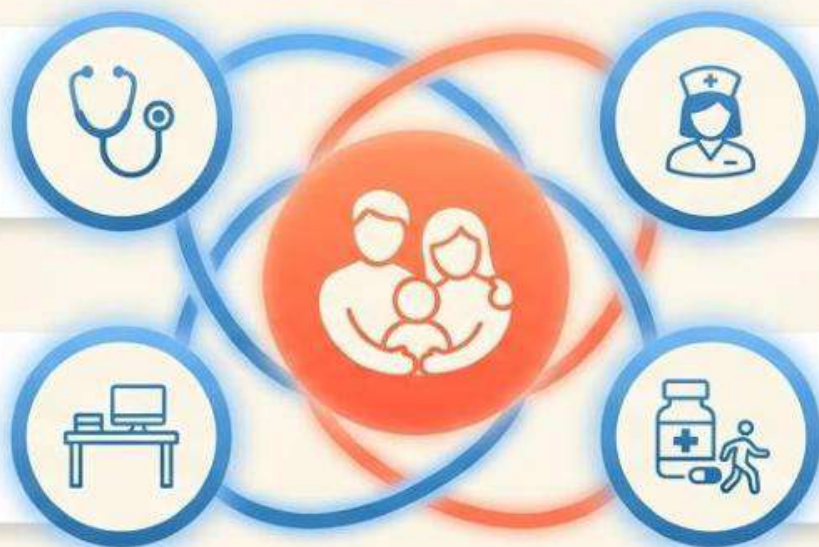
【事務・受付】

最初の窓口として丁寧な名乗り確認を行い、気づきを院内へ繋ぎます。



【薬剤師・リハ職・技師】

服薬の疑問、移動時のリスク、装置への違和感を一緒に確認します。



★ 患者さんからの疑問や指摘はクレームではありません。
重大な事故を防ぐ「貴重な貢献」として、まずは「教えていただき、
ありがとうございます」と歓迎する文化を全員で作っていきましょう。